

一般社団法人
日本新聞製作技術懇話会
会報 (隔月刊)
VOL.48 No.4
2024.8.1
(通巻 285 号)
禁転載

CONPT

Conference for Newspaper
Production Technique-Japan

広報委員会編集
編集人 井上 努
東京都千代田区内幸町
日本プレスセンタービル
8 階 (〒100-0011)
電話 (03) 3503-3829
FAX (03) 3503-3828
<http://www.conpt.jp>



※本号はCONPT-TOUR2024特集号として、ツアー
に参加された方々の寄稿を中心に構成しました

目次

CONPT-TOUR2024の足跡	3
朝日新聞社 製作本部生産統括チーム生産管理担当部長 石毛 淳美	4
朝日プリンテック 築地工場製作部技師 藤安 武雄	4
日本経済新聞社 東京本社製作本部技術グループ次長 宮崎 竹馬	5
日経東日本製作センター 製作統括本部副本部長 小林 知之	6
日経西日本製作センター 大阪工場製作部副本部長 太田 歩	7
読売新聞東京本社 制作局生産企画部次長 坪井 康宏	8
読売プリントメディア 工場管理部課長 福原 知康	9
ツアー点描	10・11
日本新聞協会 編集制作部デジタルメディア担当 茂木 丈真	12
清水製作 代表取締役 清水 英則	12
西研グラフィックス 営業本部本部長兼新聞営業部ゼネラルマネージャー 向江 一人	13
西研グラフィックス 営業本部新聞営業部国内営業課 船越 翔太	14
東芝デジタルソリューションズ ICTソリューション事業部メディアサービスソリューション営業技術部営業担当主任 谷田 浩章	16
ニッカ 営業本部新聞機器営業部部長 秋吉 康生	17
富士フイルムグラフィックソリューションズ クロスアカウント統括部第二営業部部長 巽 秀嗣	18
CONPT-TOUR2024視察報告会	19
JANPS2024に替わるイベント	20

- 表紙写真提供：CONPT-TOUR2024 入選作より
朝日プリンテック 藤安 武雄氏「サンミッシェル大聖堂」ブリュッセル
- 表紙製版：(株)デイリースポーツ
- 組版・印刷：(株)デイリースポーツ

CONPT-TOUR2024の足跡

日本新聞製作技術懇話会(CONPT)は、第45回欧州新聞製作事情視察団(CONPT-TOUR2024)を5月30日から6月6日までの8日間にわたり派遣した。今回は15名に事務局1名、添乗員1名を加え総勢17名の一行となった。

5月30日、羽田空港から、ルフトハンザ航空のボーイング747でフランクフルトへ向かった。アッパーデッキと4発のジェットエンジンを備えた懐かしい747の機体には、日本の航空会社では乗ることができない。

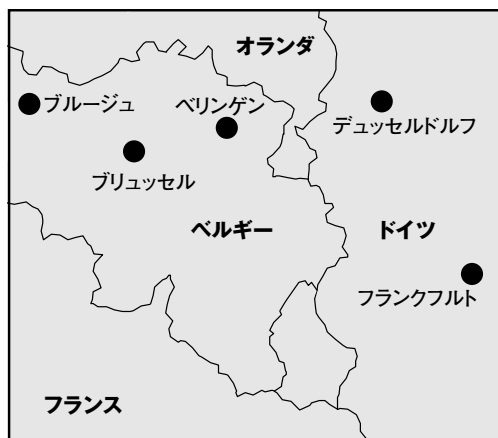
5月31日、フランクフルトのホテルから路面電車で、市内にある新聞社Frankfurter Allgemeine Zeitung (F.A.Z.=フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトUNG)に向かう。新聞の紙からデジタルへのシフトについて講演を聞いたが、紙の落ち込みをデジタルで補おうとする姿は、日本の新聞社と同じであり、紙が減少する悩みは共通のものである。印刷部数は年々減少しているものの、収益の70%は印刷(紙)であるということだ。紙の新聞の購読者の27%が80歳以上という話を聞き、デジタルシフトを急ぐ理由が理解できた。

ランチを挟んでWAN-IFRAのIngi Olafsson氏が「Newspaper Trends and AI」のタイトルで講演を行った。60か国、175人のニュースエグゼクティブを対象に昨年実施したアンケートの結果を紹介し、彼らは2024年を楽観的に見ており、印刷が主な収益源で好調な収益を予想していると述べた。また、多くの企業でジェネレーティブAIの活用には準備が不十分であると語った。

6月1日と2日はデュッセルドルフで国際印刷・メディア産業展drupa2024を視察した。テーマは「We create the future」で、52か国から1,643社・団体が最新の印刷技術やサービスを展示した。来場者数は約17万人で、前回の2016年から9万人減少したが、一方で中国系企業の展示の増加が目立った。

＜CONPT-TOUR2024日程＞

日付	視察先等	都市
5/30(木)	出発(羽田)	
31(金)	F.A.Z.視察	フランクフルト
	Ingi氏講演会	フランクフルト
6/1(土)	drupa2024	デュッセルドルフ
2(日)	drupa2024	デュッセルドルフ
3(月)	CPP視察	ブリュッセル ベリンゲン
4(火)	ブルージュ視察	ブルージュ
5(水)	出発(ブリュッセル)	
6(木)	到着(羽田)	



翌3日にはブリュッセルの東方、車で約1時間のベリンゲンで、Coldset Printing Partners (CPP)の印刷工場を見学した。CPPはメディア・コングロマリットであるMediahuis (メディアハウス)の印刷部門。Mediahuisはオランダやアイルランドなどでメディアを買収して、新聞や雑誌の印刷をCPPに集約、不要な工場を閉鎖し効率化を図っている。工場の立地は交通の便が良くドイツ、オランダ、フランスに近いため、配送面で有利である。

工場見学ではKBAの輪転機「コルティナ」の印刷準備に手間取り、時間の関係で水なし印刷を見ることができなかったのが残念であった。

かけがえのない人脈を形成

朝日新聞社

製作本部生産統括チーム生産管理担当部長

石毛 淳美

今年のCOPNT-TOURへの参加を告げられた時、まず一番に考えたのは、どのようなメンバーで参加できるのだろうか、ということだった。海外の新聞社・印刷会社・drupaを視察できるのは貴重な機会で、もちろん勉強になるとは思っていたが、それ以上に同業他社・関係メーカーの皆さんと新たな人脈をしかも濃密に作れることがうれしかった。

そして実際に、海外で15名の参加者の皆さんとかけがえのない時間・体験を共有し、今回のツアーで一番得た最大の収穫は、人脈だと思っている。



ただよう紫煙、深まる理解

特にCONPT会員社のメーカーの皆さんには、視察後の夜遅くまで自分の部屋を懇親会の場として提供していただいたり、残念ながら急きょ参加できなくなった事務局の方が果たされる予定だった役割を代替していただいたりと、感謝がつきない。また、時代錯誤かもしれないが、今回の参加者は喫煙者が多く、喫煙所談義ができたことも良かった。視察後の振り返りを一服しながら行うことで、理解を深める一因となった。今期ツアーの会の名称が「お湯かいっ!」になったので、今後も「お湯かいっ! ヤニーズ」として同窓会の際には、皆さんで喫煙所を探しては煙を囲むことにな

ると思う。

見学の本題だが、KOENIG & BAUERのCortinaや欧州の新聞後加工事情、LANDAの実物、軟包装のデジタル印刷機等を実際に見学することができ、大変勉強になったが、それ以上にドイツのF.A.Z.、WAN-IFRA・Ingi氏の講演、ベルギーのColdset Printing Partner、drupa視察を通して感じたのは、「言葉・文化は違えど悩み・課題は万国共通で、新聞業界の事業環境は難しくなっている」ということだった。特にdrupaでは、仕方がないことではあるが、印刷対象としての「新聞」は、ほぼビジネス対象として考えられておらず、自分たちの置かれている環境を再認識する機会となった。

このような環境下で、今後、より重要になってくるのは、会社を超えたでき得限りの協力であり、情報共有であると思っている。そして今回できた人脈は、それを成してくれる土壌とも思っている。

JTB添乗員の方・参加できなかった事務局の方も含め、今回のツアー参加者の皆さんには「本当にありがとうございました」、「今後ともよろしくお願いいたします」と心よりお伝えしたい。

危うし! の連続

朝日プリンテック 築地工場製作部技師

藤安 武雄

コロナ禍を経て5年ぶりのCOPNT-TOUR。8年ぶりにリアル開催されるdrupa、少し話題?の今回のTOURに数少ない、印刷会社から参加させていただきました。連日往復6時間近い壮絶なバス移動と過酷なスケジュール、1日2万歩超えの連続、常識を逸脱した円安、予定通りに全く走らないバスと、台風で帰国が遅れた前回の伝説のツアーほどではないですが、なかなかステキな6泊8日の旅でした。

drupaのテーマは「We create the future」

(未来を創造する)でした。キーワードは「持続可能性」&「デジタル化」。ほぼ新聞オフセット輪転機が展示されておらず、「持続可能性」がつかみにくい、自分には少し複雑なdrupa視察となった。



スタイリッシュな小便小僧

フランクフルトの新聞社F.A.Z.の視察では、紙媒体の売上が7割を占めるも、既にデジタル契約数(約27万件)が紙媒体(約16万部)を大きく上回っており、また紙媒体購読者の27%が80歳以上であることから、投資によるさまざまな企業努力で、完全なデジタルへのシフトを考えていると。適正な価格帯の設定もそのひとつで、朝日・読売のデジタル価格はF.A.Z.のそれよりも高く、「そのくらいにしても良いのかな?」と話していた。前回参加者のツアー記も含めて、ここまで明確にデジタルへのシフトを語った企業はなかったと思われ、またしても複雑な視察に。

ブリュッセルの東、ペリンゲンにある印刷工場CPPの視察では、今旅で初めて新聞オフセット輪転機と遭遇して、何か少しほっとした気分。残念ながら注目のKBA「コルティナ」水なし輪転機の稼働は見られなかったが、責任者の方からは紙媒体の生き残りについて、色々と興味深い話をしていただいた。紙媒体は日本版CPP的な形で、延命を模索し

ていくことになるのだろう。

そんなことより話したいのは移動のことで(そんなこととか言ったら怒られますが)、今ツアーはほぼバス移動だったのですが、それが時間通りに来なかったり、道を間違えたり、高速道路をバックで数百メートル戻ったり、行先が伝わってなかったり、また道を間違えたり、大々渋滞に巻き込まれたり。「この辺やと思うからこっから歩いて!」って言われたり。それは本当に苦難の連続でした。帰国便に乗り遅れそうになり、危うくCOPNT-TOUR2回連続帰国遅延に至るところでした。今思えば空港内を走り続けたランニング搭乗はちょいおもしろかったけど…。

最後になりますが、今回参加された皆様、事務局の皆様、JTB加藤様、また毎晩やたら顔を合わせた喫煙グループの皆様にご心からお礼申し上げます。

Tour de CONPT

日本経済新聞社
東京本社製作本部技術グループ次長

宮崎 竹馬

CONPT-TOUR参加を打診され視察先を聞いた瞬間に歓喜した。念願のdrupa視察が含まれていたからだ。このツアー参加は会社人生のハイライトになるかもしれない。そう期待しながら早速予習を始めた。海外は米国とペルーしか行ったことがないため、欧州訪問は初めてだ。自転車ロードバイクレースが大好きで欧州の街並みはツール・ド・フランスを始めとするさまざまなレースで長年脳裡に焼き付けてきた。故に予習は今回の訪問地が舞台となったレースの録画を見直すことから始まった。以降、視察先と訪問地のレースを織り交ぜて振り返りたい。

最初の訪問地はフランクフルト、F.A.Z.を視察した。電子版での売り上げを伸ばすも収益の大半は紙であり新聞社の悩みは万国共通で部

数減を電子版で補えていないことを再認識した。フランクフルトは毎年5月1日のメーデーに開催される「エシユボルン＝フランクフルト」のゴール地点だ。ゴール周辺を視察し画面の中の世界が目前にあることに感動した。

2番目の訪問地はデュッセルドルフ、ツアーの目玉であるdrupaを視察しその規模に圧倒され感無量であった。目玉となるような技術はなかったが、中国企業の出展が多く今後のブレークスルーに期待したい。デュッセルドルフは「ツール・ド・フランス2017」の出発地であったが、バス移動でレースルートと被らず視察は断念。



エディ・メルクス駅にて自転車と共に

3番目の訪問地はベルギーの首都ブリュッセル。近郊の新聞印刷工場CPPを視察した。初めて見る水なし印刷の刷版とKBA製輪転機コルティナ。刷版自動着脱や水なしによりスキルレスで運転できるという点で時代に合った機械であるが、キーレスインキ故に細かい色調整ができない点が気になった。

ベルギーは自転車を国技とする国であり、ツール・ド・フランス歴代最多勝のエディ・メルクス(現在79歳、野球でいうと長嶋茂雄と王貞治、イチロー、大谷翔平をミックスしたようなレジェンド)を生んだ国だ。「ツール・ド・フランス2019」の出発地がブリュッセルになったのもエディが1969年の初戴冠(総合優勝)から50周年を記念して選ばれたというくらい歴代最高の選手だ。レースルート視察には飽き足らず、彼の名を冠した地下鉄駅「エ

ディ・メルクス駅」も視察した。街中のベルギー人にエディを知っているか10数人に尋ねたが認知率100%であった。

最後に本ツアーで出走した14名の「選手」達との絆は一生ものでこれからも大切にしたい。ツアー直前に体調不良で出走できなかった「選手」がいたことが唯一の心残りだが、トラブルを乗り越えツアーを完走できたのも木暮「監督」の導きとJTB加藤氏のサポートがあったからこそ、謝意を述べたい。今後もチームメイトとトレインを組んで新聞技術を牽引して走り抜きたい。「帰宅するまでが遠足」と子供の頃言われたが、帰国後にコロナに罹患(りかん)していたことが判明し40度の高熱に苦しんだ。帰国・帰宅ではなく完治までがCONPT-TOURであることを体感した。

抱える悩みは東西同じ

日経東日本製作センター
製作統括本部副本部長

小林 知之

「まだまだ先なので大丈夫」。ツアーへの参加が決まった時はそう気楽に構えていた。とはいえ仕事で海外に行くとなると、どんな準備をすればよいのやら。帰国が延びた、ICレコーダーが必須、資料整理が大変など、先達のさまざまな経験談のおかげで準備に反映することができた。欧州行き自体20年近く前のこと。直前に長男が卒業旅行で同じエリアを回り、現地事情を聞き少し余裕をもてたのは助かったが、あつと言う間に当日を迎えた。

出発は昔と違い成田ではなく羽田から。だが飛行機は懐かしいジャンボジェット。日本では見かけなくなってきた大きな機体は長旅も安心して過ごすことができた。

ドイツ・フランクフルトでは有力紙のF.A.Z.社を訪問した。一昨年に移転した新社屋は非常にモダンな建物。紙の読者の3割弱は80代以上という話と、部数減に苦しむ中で



懐しいジャンボジェット

も悲観せずに紙を維持しつつデジタルに活路を見出そうとしている姿勢に感銘を受けるとともに、抱える悩みに東西差がないことを再確認した。

今回のツアーはバス移動が多かった。drupa会場のデュッセルドルフにはフランクフルトから片道220km、3時間ほどで2日間2往復。海外での長距離の車移動は稀な経験。多くの風力発電、長大な牽引トレーラーなど日本と異なる車窓も堪能できた。

drupaは8年ぶりの開催で参加者の熱気があふれていた。商印メインだが、業界のトレンドや未来の姿を感じた場であった。出展は多数がデジタル印刷機とパッケージング。オーダーの少ロット化が進み、デジタル印刷機が機能向上と省オペレーションで時代にマッチしてきたことを如実に表す風景があった。さらに、印刷と後加工をダイレクトに繋ぎ、リードタイム短縮を打ち出していたのも印象的だった。ロボットアーム、搬送機器の制御性能向上と省人およびスキルレスのニーズがうまく合致してきたことを感じた。

2日間会場を回ったが、初日は有力社見学、翌日は全展示ホールを走り回るだけで精一杯。気になる展示を再訪する時間も体力も残らず、規模に圧倒された見学となった。

ツアーを通じて、業界の悩みを解消する妙薬はなく、欧州も悩みつつ今できることを着実にやっていることを感じた。印刷業界のトレンドもデジタルに抗えず、上手く取り入れ

るしかないことも改めて理解した。

今回は訪問した先々で丁寧な説明とおぼつかない質問に対応していただいた。いつか海外からのお客様を迎えることがあれば同様に接するように努めたいと思う。

結びに、ご一緒した皆様に貴重な意見交換をいただいたことお礼申し上げます。最後に渋滞で諦めかけた帰国便に機転をきかせて間に合わせてくれたバス運転手のエルビスさんにも感謝いたします。

「美」を堪能

日経西日本製作センター
大阪工場製作部副部長

太田 歩

参加の打診があり家族からも後押しされ、断る理由もなく快諾。25年前の新婚旅行でヨーロッパ4か国(イギリス、フランス、イタリア、スイス)を訪れた記憶もよみがえり、パスポートの再発行から急いで準備を整えた。

期間中はドイツ・ベルギーを訪問、新聞社の置かれている立場や今後の課題は、我々と共通する部分が多いと感じた。疑問があれば積極果敢に質問しようと日々を過ごした。「今の収益構造の中で、今後、価格改定も視野に入れている」や「将来的に全てをタブロイド版に」など、なぜそのような考えに至ったのか切り込んでみた。

drupaの会場では、出展するすべての会場を見て回った。歩き疲れ同じベンチに座った外国人にも話しかけ自分の会話力を試してみた。ドイツ人であったが英語が通じ、44歳の若者？で1人で来場したとのこと。「記念に写真を撮ろうか」との問いかけに快く応じてくれた。

ベルギーで少しの空き時間を利用し、地下鉄や現地の鉄道にも乗ってみた。券売はタッチパネルで聞く人もおらず、切符の買い方がなかなかわからない。時間を見て駅に着くも

ホームは地下4階ほど下ることがわかり猛ダッシュ。目当ての23番ホームに着くと様子がおかしい。駅員さんに聞くとブリュッセル行きは「21番ホーム」。またもや猛ダッシュ。ほどよい運動もでき翌日は筋肉痛になっていた。



古い街の美にふれたブルーージュ

食べ物が口に合うのかと心配したが、朝食はパンやハム、チーズ、昼食はハンバーガー、ホットドック、夕食はソーセージ、ムール貝、豚のすね肉なども食したが全てが美味。歴史的建造物など美しい街の文化にも存分にふれることができ、時間を持て余すことなく「美」を堪能できた。

いい話ばかりではなく円安の影響で物価高。水やコーラ、マクドナルドは2倍ほどの金額になっていた。ほぼ毎日スーパーに出かけ、現地でのお金の使い方や安い品探しに生活力も養えた。

短い期間であったが、とても楽しい時間を過ごし、何よりもいいメンバーに恵まれた。寝坊や遅刻、盗難など皆が気にしているところだが、大きな問題もなく過ごすことができ、異国での対応力や会話力など優秀な方達が集まっているのだと感じた。

唯一、帰路だけは慌ただしかった。高速道路で事故多発により思いがけない渋滞に巻き込まれる。

慌ただしく空港チェックイン。ブリュッセル―フランクフルト―東京羽田―大阪伊丹と飛行機を3回乗り継ぎ、無事に家路に着いた。帰国後に思わぬお土産報告が舞い込み、出勤

できず経過観察扱いとなったが、時間が経てば思い出話になるのだろう。

職場を離れしばらく迷惑をかけたが本当にいい経験ができた。準備から携わった全ての方々に感謝を申し上げたい。

何と刺激的な日々

読売新聞東京本社
制作局生産企画部次長

坪井 康宏

時間が経つのは早いもので、COPNT-TOUR2024から帰国して、もう1か月が経ちました。私の会社人生の中で5本の指には入る刺激的な1週間からもうそんな時間が経ってしまったのか、とこの原稿を書きながら嘆いています。

初めてのドイツとベルギー。『感想記』なので仕事の話は二の次に、心に残った話を中心に振り返ります。

▼半日を超える飛行機

ロシア領空を通れない今、どうやって飛ぶのだろう…と疑問に思っていましたが、往路はベーリング海・北極点を通っていくとは露にも思わず。確かにこれじゃ12時間超える…。隣席だったドイツ人の体格のいいお兄さんはだいぶつらそうでした。

▼ドイツのまんが肉



「ドイツ まんが肉」で検索すると出てくるアイスバイン。「ドイツはジャガイモ料理ばかりだろう」と高をくくっていましたがとんでもない。ドイツで食べた料理はどれもおいしくて、驚きました。写真を見返すとまた食

べたくなってきます。

▼ビル解体中でも営業しています！

それはブリュッセルでのこと。仕事で建屋関係に長く携わっているので建築工事はどうしても気になってしまい、ホテルの近くでビル工事をしているなあ、どんな工事でどんな機材なのかなあ…と覗いてみると、あれ、上層階は解体工事中なのに1階はお店が営業中…。というか足場も防音防塵シートもないなんて…。びっくり仰天。



楽しい旅でしたが、悔やまれるのは営業時間内に間に合わず本場のワッフルを食べ損ねたことです…。最後の最後はブリュッセルの事故渋滞で飛行機に間に合わないか!?と冷や冷やしましたが滑り込みセーフ。

JTB、そして何といっても珍プレー好プレーを提供くださったバスの運転手の皆さま、ありがとうございました！

貴重な経験に感謝

読売プリントメディア
工場管理部課長

福原 知康

2月某日、社長と部長に呼ばれた。この状況、普通に考えればあまり良い話ではないだろうと思っていたところ、「海外で開催の展示会を含んだツアーに参加してもらおうと思っているんだけど大丈夫？」と。断る理由はないし、海外出張だし、二つ返事で即答をしたが、何かにドキドキしたのを覚えている。

海外へは新婚旅行で行ったきりで、何を持

っていけばよいかもわからなかったが、以前ツアーに参加した同僚の話を聞いて、何とか準備をした。

羽田空港からドイツのフランクフルト空港まで10時間以上のフライト。映画も食事もあり退屈はしなかったが、中々の長旅だった。

空港に着いてからの入国審査では、空港職員の言葉が全く分からず、10分以上止められた。途中で入国できるのかと思ったほどだ。

ツアーでの訪問先は、新聞社・印刷工場・drupe2024という展示会。

海外の新聞事情は全くわからなかったが、発行部数の減少、またそれを補うため、デジタルに力を入れている点、日本と同様の悩みがあるのだと感じた。印刷工場に訪問した際は、長年嗅いできたインキの匂いが、足早に慌ただしく見学していた少し余裕のなかった気持ちを落ち着かせてくれた。

展示会場ではデジタル印刷機のオンパレード。輪転機で新聞を印刷している我々にとっては異次元のように思えた。ただ、どうにか活用できないかとも同時に思った。

ドイツ、ベルギーとヨーロッパ独特の街並みを満喫し、現地の食も堪能することもできた。

減多に見聞きできないことを肌で感じ、大変な海外視察だった。

最後に、ツアーに参加された皆様に感謝いたします。人との出会いが、自分の財産になること、改めて感じさせていただきました。皆様の益々のご活躍祈っております。

———drupeの会場で





ドイツ

デュッセルドルフ・フランクフルト



フランクフルトの「正義の女神」
(坪井 康宏氏)



<8年ぶりのdrupa視察>



WAN-IFRAのIngi氏講演



＝デュッセルドルフ



<F.A.Z. 訪問>

活発に意見交換



ユニークな本社ビル
＝フランクフルト

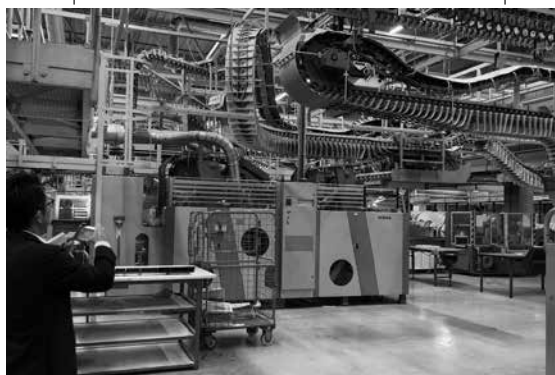


ベルギー

ブリュッセル・ペリンゲン・ブルージュ



Coldset Printing Partners見学



=ペリンゲン



ブルージュの風景(巽 秀嗣氏)



夜のブリュッセル市庁舎
(藤安 武雄氏)



パサージュ・デュ・ノール
=ブリュッセル(小林 知之氏)



サイクリングスタイルの小便小僧

||ブリュッセル(坪井 康宏氏)

世界に触れた経験は、かけがえのない財産

日本新聞協会

編集制作部デジタルメディア担当

茂木 文真

不安いっぱいのパッキングしていた当時の私に伝えたい。COPNT-TOURへの参加が、あなたの職業人生にとって大切な財産となることを。

ロングフライトを経てたどり着いたドイツ・フランクフルト。最初のイベントはエリア総合紙F.A.Z.の視察です。オフィス街と住宅エリアの間にそびえる、洗練された自社ビル。デジタルサービスの取り組みについて、じっくり話を聞きました。メインサービス「F+」を軸に、27万ものサブスクリプション会員を抱える同社。紙面購読者の十数万人を大きく上回ります。プロセスを細分化し、場面に応じた施策を打つことで成果を挙げているとのこと。

目からうろこだったのは、ニュースレターの末尾に編集長のメールアドレスを記載する取り組みです。ユーザーの生の声をくみ取れることに加え、参加型のメディアとして強固なエンゲージメントを築くことができます。「デジタル会員から紙面購読への転換を目標にしている」との説明も印象的でした。デジタルへのシフトが世界的に加速していますが、やはり新聞の原点は紙。その重要性が変わることはありません。

ツアーのハイライトは、世界最大の印刷技術見本市drupaの視察です。18の巨大な展示ホールを行き交う数万人の参加者。巨大な機械が所狭しと並べられている光景は圧巻でした。ブースを巡り終える頃、脚はパンパン、脳みそもパンク状態。非日常的な空間に興奮しすぎたようです。

各社が技術の結晶として示す印刷サンプルには、世界の絶景や名画が色鮮やかにプリン

トされており、手に取らずにはいられません。イタリア・ボローニャに沈む夕日の絵、部屋に飾ってあります。



drupa会場、圧巻の光景に興奮

ハプニングも旅のほどよいアクセント。高速道路の出口で急バックしたり、渋滞に巻き込まれて延泊の危機を迎えたり。どんな状況でも最高のメンバーに恵まれたおかげで、和気あいあいと乗り切ることができました。

訪問・視察、食事、ハプニング。どの瞬間を思い返しても、自然と笑顔になってしまうツアーでした。帰国後いちばん体重計に乗ったところ、どうやら5000グラムの幸せを持って帰ってきてしまったようです。思い出を味わいながら、食事制限する毎日を送っています。

ツアーの大成功はひとえにCONPT事務局の皆さん、JTBの加藤さん、そしてメンバーの皆さんのおかげです。この場を借りて、心から感謝申し上げます。

「熱」を帯びたCONPT-TOURに感謝!

清水製作 代表取締役

清水 英則

「良いツアーだった!」

8日間の旅程を経て羽田空港で解散した際の第一声だった。

もちろんツアー参加者全員大きなトラブルもなく、無事に帰国できたこともその大きな

要素であったことは視察団団長としてここに記しておきたいと思う。

私が前回参加した2003年はツアー参加者の中で最年少だったこともあり、他の方々の後を追うことに必死だったとの記憶が大半を占めているが、21年を経て参加した2度目のCONPT-TOURについて振り返りたいと思う。珍道ネタについては同志に委ねますの悪しからず！

ウクライナ情勢の影響により飛行ルートは大きく変更され、14時間を超えるロングフライトとなった。もう搭乗することはないと思っていたジャンボジェットに揺られようやくフランクフルトに到着した。現地では皆同じだと思うが1€=170円超えの円安と物価高の影響を肌身で感じた。食事、買い物と何をするにも円換算して溜め息……。どの都市でも日本からの観光客はほとんど見かけないという状況も自然とうなずけた。

現地視察はドイツのF.A.Z.（新聞社）、ベルギーのColdset Printing Partners（印刷工場）の2社を訪問し、あわせてWAN-IFRAのIngi氏の講演会が開催された。どちらの社も我々ツアーを温かく受け入れてくれプレゼンテーション、工場案内と大変満足できるものとなった。

8年ぶりに開催されたdrupa2024視察においても、日本企業の出展社はどの社も我々ツアー一行を快く受け入れ、丁寧に対応いただいた。どの視察をとってもCONPT-TOURでなければ得ることはできない貴重な情報共有ができた。

視察内容についてはツアー報告会等を参照いただくことで割愛させていただきますが、視察を通じて常にご感じたことが参加者の「熱」

です。

視察先でのミーティングでは質問は途切れることなく続き、drupa2日目のフリー視察においても皆が口を揃えて時間が足りないと言っていた。皆がこのツアーを通じて何かを得ようと常に前向きに情報収集に努めていました。この「熱」こそが今後の新聞業界を支えていくエネルギーになることと強く感じた。そして例の「お湯」もこの「熱」がもたらしたハプニングだったのかと！

「良いツアー」と感じ得たのはこんな「熱」を帯びた素晴らしいメンバーと8日間にわたり過ごせたことにつきますと思います。ツアー参加者、事務局、JTBの皆様には紙上をかりて改めて御礼を申し上げます。

CONPT-TOURは何かがおこる!?

西研グラフィックス
営業本部部長兼新聞営業部
ゼネラルマネージャー

向江 一人

ハプニングは出発前日から始まった。

別件でCONPTの仕事をしていると、急きょコーディネーターが諸事情でツアーに行けなくなったとの連絡。現地の通訳も兼ねていたので大変なことになった。とりあえずJTBに連絡し現地通訳を探してもらう。2日後には通訳が必要になるため、難しい調整が続く。

そこでたまたま弊社海外営業が別件でドイツに滞在する予定だったので、無理を言って通訳をお願いした。「会話とリアルタイムの通訳は違う」ということで難色を示していたが、藁(わら)にもすがる思いでお願いして、了承を得た。その後、JTBの通訳も手配が決まり、なんとかツアーを遂行できることになった。

出発初日は羽田からフランクフルトまで約14時間半のフライト後、バスでホテルに到着した。かなり疲れていたが、水と食料を確保するため、みんなで街にくり出した。ホテル



が繁華街の近くだったので、夜となつては少し危ない雰囲気もあったが、集団で行動することでなんとか街の雰囲気を満喫することができた。

しかし、ここでまたアクシデントが起こる。石畳に慣れてない私は痛恨の捻挫をしてしまったのだ。その日は少し痛むくらいだったが、次の朝には、象の足のように腫れあがっていた。

今回のツアーは歩くことが多く、信じられないほど広いdrupa会場では2日間歩きっぱなし、オプションツアーのブルージュ観光も街を散策するというもので、1日平均2万歩を歩いていた。足を引きずりながら必死についていく日々だった。



ブルージュのひととき

最終日の前日、サヨナラパーティーの席では、今回は2019年の前回ツアーとは違って、『大きなハプニングもなく無事に帰国できるだろう』というようなことを話していた。しかし、このツアーはこのままでは終わらない。

帰路の空港に向かう時、事故の交通渋滞で全然バスが進まない。空港に到着したのは出発の30分前。通常なら保安検査場の締切時間と思われるが、なんとかチェックインしてくれた。

しかし、預け荷物が重量オーバーと言われ、

慌てて中身を取り出し手荷物にしてクリアに。次は保安検査で手荷物が引っかかり再検査。急いでいるのにマイペースで仕事をこなす検査員。OKになったのは出発時間。JTBのKさんから「走りましょう!!」と声を掛けられ、搭乗ゲートまで全力で走った。搭乗時間は過ぎていたものの、まだ搭乗中でなんとか飛行機に乗ることができた。とんだ目にあった。

ここで少し本目的の話だが、今回始めてdrupaを見学した。日本で行われる展示会の何倍もの規模でじっくり全部回るのは難しかった。その規模でも新聞印刷関係は数ブースだ。メインは商印関係、デジタル印刷、後工程など。それでもなにか新しい技術を吸収できないかと展示会をうろうろした。

新聞社のF.A.Z.や印刷工場のCPPなどを視察し、課題は日本と似ていると感じた。部数減による収入の減少や人手不足の対策など。これらは印刷関係者の共通の課題であり、drupaで展示されていた自動化(スキルレス)は、今後進めていく課題だと感じた。

最後になるが、COPNT-TOURは独特な一体感がある。色々な新聞社、メーカーなどが集まったが、目的が同じで苦楽を共にすることで仲間意識が生まれている。今回のツアーも色々な意味で大いに身になるものだった。皆さまも機会があれば是非参加してほしい。

まだ伸び代がある

西研グラフィックス
営業本部新聞営業部国内営業課

船越 翔太

COPNT-TOUR2024に参加させていただきました。今回、西研からは2名参加しましたが、ツアーが実施されるとの話が出た当初は、1名参加で、私の上司が予定されていました。数か月たったある日、休憩中に上司から「大

事な話がある」と改まった話の入りから、今回の参加指令が下されました。

今回の目玉は何と言ってもdrupa2024が開催されることです。展示会視察の経験はほとんどなく、展示会に入るまではどの程度の規模なのか想像がついていませんでしたが、到着するなり人・人・人。かなりの盛況を感じました。実際入場してみるとそれは圧巻で、展示会規模の大きさを目の当たりにして、大変なところに来たと実感しました。

drupaはやはりデジタル印刷がメインで、オフセット印刷機器は全くなかったことが時代の変化を感じました。多くの企業が横並びの印刷機を展示し、速さや品質の高さをうたっていたのですが、新聞印刷に置き換えることができるようなスペックではなかったかと感じました。



drupa視察初日、8ホール入口にて

初日は日本メーカーの展示会をツアーメンバーでまわり、各企業の説明を受けました。そのような中、メーカーの視点から見た感想として「日本企業頑張ってるなあ」と感じました。

ブースの大きさは展示品により違うのですが、FFGSやKOMORIなどは展示ホールの3分の1から4分の1を占める割合で展示場を設けており、搬入から商談、撤去のことまで想像するとかなりのコストもかかっているのだろうと想像し、drupaにかけの思いが強いことを感じました。「西研も開発品や最新鋭の

装置を展示して、COPINT-TOURメンバーを出迎えられてたら誇らしかったなあ」とも感じました。

次に、ドイツ・ベルギーの新聞社見学についてですが、ドイツではF.A.Z.を訪問させていただき、新聞発行の現状、デジタルや紙媒体の発行部数などの説明を受けました。海外でも日本と同じような悩みを抱えており、紙の新聞発行減が目立ち収入が落ちている。一方でデジタルは会員が増えており、印象としては好調のような話しぶりでした。

話の中で衝撃的だったのは紙の新聞購読料が日本の倍以上していたことと、デジタルはその金額の半分で契約していること。紙の新聞はその金額でも購読者が納得して購入していることが文化の違いを感じました。やはり新聞はネットに比べ深掘りされた記事が多く、そのくらいの金額が妥当なのかなとも感じました。

余談ですが、韓国の新聞購読料は日本より安いそうで、購読料を上げることは読者の反発が強いためできないと訪問時に話された新聞社がありました。

また同日に、WAN-IFRAからも講演が行われ、各国の新聞社の経営状況やAI導入についてのお話がありました。経営については60か国の約半数が楽観的に構えているとのデータがあり、これについては結構衝撃でした。日本の新聞事業は下降が続いており、暗い雰囲気が続いているため世界共通かと感じていましたが、世界はそこまで深刻ではないようだった。AIについては世界共通で、始めたけれど何をしたら良いか分からないような状況でまだ手探りが続いているようでした。

ベルギーのColdset Printing Partnersは、Mediahuisというメディア大手の印刷部門を担っているという。Mediahuisは国内に点在していた新聞社や印刷会社を吸収・合併させつづけ、約10年間で今の規模へ発展していると説明を受けた。剛腕であり、それだけ集約

化できる企業が多かったのではないかと推測しました。

今回のツアーを通して、印刷業界としてはまだ伸び代があると感じたが、新聞においてはデジタル化、つまり紙媒体の衰退が顕著になってきていることと感じました。西研は新聞印刷事業に支えられて継続している会社であるため、今後継続させるにも新聞事業以外の分野でも柱が重要になってくると感じました。

最後に、今回のツアーメンバーの方々には大変お世話になりました。非常に有意義なツアーとなりましたこと感謝いたします。

苦い記憶が消えた旅

東芝デジタルソリューションズ
ICT ソリューション事業部
メディアサービスソリューション営業技術部
営業担当主任

谷田 浩章

CONPT-TOUR2024は5月30日に出国し、6月6日の帰国までの間にドイツとベルギーの2か国を訪問。新聞社、drupa、印刷工場の視察を大きな問題なく終えることができた。

個人的には7年前 同国への訪問時に、海産物に当たってしまった苦い記憶があり、それを払拭できるかどうかひとつのポイントとなる。



北極が見えた

【出国～ドイツ入国 フランクフルト】

昨今の状況より通常のルートと異なる航路

を通ることとなったが、機内から北極を見ることができ、貴重な経験ができた。

【2日目：F.A.Z.社視察】

ドイツの日刊紙フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトゥング社を訪問。

電子版契約者数が紙面契約数を上回っている新聞社だが、これは電子版の契約者が増加している反面、紙面契約者が減少していることも要因の一つ。また、新聞紙面契約者の30%弱は80歳以上という年齢構成であり、更なる契約者減が想定されている。従来の規模をどう維持・成長させていくかが課題となっており、デジタル化対応や顧客獲得、収益確保は国内外問わず共通であることを再確認した。

【3日目、4日目：drupa2024視察】

8年ぶりの現地開催となるdrupaを視察。

スペックアップなどの展示が主となり、革新的な技術を見つけることができなかったが、SDGsへの取り組み(インクの見直し等)も進んでおり、次回は新たな技術を見ることができるようではないかと感じている。

【5日目：CPP社視察】

ベルギーにあるコールドセット・プリンティング・パートナーズ社の印刷工場を視察。作業の効率化・簡素化——この2点について取り組んでおり、新人が2か月で実働可能な環境になっているという説明には驚いた。

【全体を通して】

各新聞社や展示会の視察、講演を聞く中で従来からの課題となっていた効率化や自動化、スマートファクトリーへの取り組みに加え、昨今の世界状況(移民、高齢化、SDGsへの取り組み)をふまえた対策が必要となってくる中、手探りで検討を進めているが、明確な答えまでは見つかっていないと感じた。

【個人的に…】

お店やホテルの朝食など、非常に美味しく(海産物にも当たらず)食事に対してのイメージは払拭することができた。一つ悔いが残る



美食の街で乾杯

とすると、最後の最後、帰国中に罹患(りかん)してしまったことだろうか。それもまたご愛嬌、ということで締めさせていただくこととする。

経験を共有、かけがえのない時間

ニッカ

営業本部新聞機器営業部部长

秋吉 康生

ユーラシア大陸をベトナムより西に行くのは初めてで、TVや冊子でしか見たことのない風景や雰囲気を感じると、気持ちが高揚したままCONPT-TOURの出発当日を迎えました。

【同行の皆様と】

同行の皆様とは事前説明会で初めてお会いの方がほとんどで、出発当日も15分程度の皆揃ってのミーティングで、充分に交流のできないまま次の合流はドイツの空港とのこと。搭乗も各自バラバラで乗り込み、飛行機の中も皆さん席がバラバラで会話の機会も少なく、正直交流がとれていないことに焦りを感じていましたが、しかしその杞憂(きゆう)はすぐに解消されました。

イミグレーション通過になんと2時間もかかったこと、合流後なので列の前後に同行の皆様がいたこと、イミグレの対応が悪いという共通の話題がうまれたことで、会話する機会を得られ親睦を深める時間ができて一安心です。

【想像以上のヨーロッパ街並み】

古い建物は東西を問わず趣きがあり、なぜかホッとする感覚を覚えることがあります。中山道の妻籠宿や飛弾高山の古い町並みなど、何度行っても癒されます。ただ、日本は美観地区等にある1区画だけが古い建物であることが多いのに比べ、ドイツやベルギーは街全体に歴史ある建築物が多く驚きを隠せませんでした。

旧市街の至る所にある教会・劇場・住宅等が教科書で見た中世ヨーロッパそのまま、私のイメージしていた通りの街並みで感動です。その街並みの中を同行した皆さんと、あれこれと他愛のない話をしながら散策したこと、きっと帰国後の会話に花を咲かせるであろうことは間違いありません。

【心残りのベルギーワッフル】

旅の醍醐味の一つである食ですが、ドイツではビールやソーセージやアイスバイン、ベルギーではムール貝ワイン蒸しやワッフルと絶対に食べて帰ろうと思う料理がいっぱい。

ドイツでは目的を達成し、ベルギーでもワッフルを残し、ムール貝他郷土料理を堪能できていました。



食べそこなった…

街を散策中にすれ違う人がワッフルを片手に食べ歩きしている姿を確認する度に、あのワッフルはどこで売っているのだろうと見ま

わし、店先に並んでいる色とりどりのクリームやアイスやチョコレートでデコレーションされたワッフルをチェックするなど、情報収集を怠りません。

夕食後を買って帰ろうと店に向かうと店じまいしており、慌てて時計を見れば夜の9時…空の明るさに時間感覚が狂い痛恨のミス。結果、空港でも食べる機会が得られず、泣く泣く帰国した次第です。

視察団の皆様とさまざまな経験を共有できたことは私にとってかけがいのない時間でした。この時間を大切に、これからもお付き合いをさせていただきたいと考えます。

最後に、視察内容は別途報告会があると聞いていますので、私の拙い視察報告は割愛し、TOUR＝旅について語らせていただきました。

視察は順調、喉はカラカラ、バスはハラハラ

富士フィルムグラフィックソリューションズ
クロスアカウント統括部
第二営業部部长

巽 秀嗣

CONPT-TOURは2010年度の参加から2回目。参加者の中で年齢はベテラン勢であり、

過去の諸先輩に見習って視察の成功とツアーの安全を願っての参加でした。

訪問先のフランクフルトとブリュッセルでは、歴史的建造物や街並みが訪れる人を魅了し、路地には多くの縦列駐車が並び、上手にすり抜けるバスとレンタルと思われる電動キックボードが大量に出回っていた。カフェやレストラン・ホテルでは無料Wi-Fiスポットがあり、デジタルデバイスの普及に確実に対処している。

訪問したメディアF.A.Z.は、日本同様にデジタル化、読者高齢化、用紙などの生産コストアップにより、印刷ビジネスが減少している。紙メディアを大切にしている一方、デジタル含め業態変革を垣間見た感じがした。

印刷会社の訪問はColdset Printing Partners。水なし印刷や脱廃プラなど環境対応を強化し、紙を守りながらビジネスに積極的に取り組んでいる姿が見て取れた。地の利を生かし、ベルギー国内だけでなくオランダ、ドイツ、フランスに印刷物を配送している。印刷機材もさまざまなビジネスに耐えるべく改良を加えていて、プリントロールを用いた雑誌を含め多様のサイズに順応している。

どちらでも情報交換及び現地研修会でより

〈Coldset Printing Partners 訪問〉



プリントロール



本社の外観

良いディスカッションができたのは言うまでもなく、対応してくれた通訳の方にも感謝である。

drupa視察は、過去のCTPやインクジェットの強烈な発表のあったインパクトある雰囲気



フランクフルトのレーマー広場

気ではなかったが、デジタル領域を広げる最新技術やコネクトの実演が多かった。この地の空気が低湿である他に会場が熱気を帯びていたのか、小職を含め数名は喉を傷めてしまった。これが災いになったのか不確かだが疲労が増えてしまったのかもしれない。

バスにはハラハラした。デュッセルドルフからベルギー行きの道を間違えて高速出口を200m以上バックしたこと、最終日の空港行きでは高速道路が渋滞しており機転を利かした迂回(うかい)で間に合った。10分遅れたら飛行機に乗り遅れるところを回避したバス運転手に感謝でした。

このツアーに準備をしていただき、温かく迎えてくれた方々がいなければ、これだけの情報に接する機会はなかったであろう。参加の皆様、事務局、JTBの方々にあらためて感謝を申し上げます。



清水氏



小林氏



石毛氏

CONPT-TOUR2024 視察報告会

CONPT-TOUR2024の視察報告会を7月22日、日本記者クラブ・大会議室で開催した。

CONPT会長の清水英則氏(清水製作)が団長挨拶を行い、続いて小林知之氏(日経東日本製作センター製作統括本部)が、「新聞社上流工程(デジタルシフト)並びにWAN-IFRA Ingi氏講演会」について報告。

その後、石毛淳美氏(朝日新聞社製作本部)が、「新聞社下流工程(印刷の効率化)並びにdrupa2024」について講演した。

報告会は、新聞社関係17社37名(内オンライン20名)、CONPT会員社15社25名(内オンライン10名)の64名と事務局他6名が聴講した。
(事務局)

「JANPS in page 2025」 来年2月に開催

今年11月に製作技術研修会

日本新聞製作技術懇話会(CONPT)が新聞製作技術展「JANPS2024」に替わるイベントとして企画、検討してきた展示会および製作技術研修会の開催が決まった。日本新聞協会技術委員会が7月5日に開いた会合で、「CONPTから提案のあった情報収集・交流のためのイベントを、11月と来年2月に実施する」と決定、CONPTと共催の形をとることになった。

今年11月に読売新聞鶴見工場の視察を中心とした製作技術研修会を実施。来年2月には、新聞社の業務全般に関する展示会を『JANPS in page2025』として開催する。これは印刷・メディア業界の総合展示会page2025への出展となる。

2024年に予定されていたJANPSは昨年秋、開催見送りが決定。物価や人件費の上昇、出展意欲の低下が主な要因だった。しかし、「これは情報発信意欲の低下を意味するものでは



今年2月に開かれたpage2024

ない」との共通認識にあって、CONPTでは新聞社に最新最適な技術を提供、共有できる場として「JANPS2024に替わるイベント」の検討を始めた。

新聞社や新聞協会技術委員会の情報技術部会、印刷部会と意見交換を重ねる中で、上流系からは従来のような見本市的な展示会を望む声上がり、下流系からは生産設備・機器について、パネルや動画などではなく実際の機械を見たいという要望が浮かび上がった。

こうしたニーズに応えるために、製作技術研修会と展示会を企画、検討することをCONPT2024年度事業計画に掲げた。

【JANPS in page2025】

毎年2月に東京・池袋で開催されるpageとジョイント。JANPSゾーンを設け、従来と同様の見本市的な展示会とする。JANPSとして2018年以来7年ぶりの開催となる。

「新しい時代に向けたDX 製作技術から総合技術へ」をテーマに、製作部門だけでなく編集・総務・デジタル・販売・広告など新聞社の業務を広くカバーする最新技術・製品情報を発信する。

▽日時：2025年2月19日(水)～21日(金)

3日間とも10:00～17:00

▽会場：サンシャインシティ文化会館展示ホール(東京・池袋)

【製作技術研修会】

実機を見たいという要望に応えるため、新聞印刷工場の視察をメインに企画。メーカー・

ベンダーの技術者が自社の設備・システムを説明することで、より深い技術情報の提供や意見交換を実現する。工場見学にセミナー・懇親会を組み合わせ情報の共有・交換と業界内の交流を図る。

視察予定の読売新聞鶴見工場の輪転機はAI活用によるAPP (Auto-Pilot Printing) で自動運転とスキルレス化を図り、2022年度の新聞技術賞を受賞している。

▽11月14日

セミナー：最新技術・製品情報・実例などの紹介、工場の紹介、設備説明

懇親会：立食形式

▽11月15日

工場視察：読売新聞鶴見工場

- ・納入社の技術者による設備、システム説明
- ・夕刊初版の印刷を見学